

二〇一七年度 第二回

国語 (50分)

△注意▽

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから27ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

この何十年か、「個性」や「オリジナリティ」の重要性がずいぶん強調されてきました。

個性重視というのは、「今・ここにいる・私」を絶対化することです。

でも、個性というようなことをあまり軽々に使うのはどうかと思います。^①これはけっこう危険なことばだからです。

ぼくたちがあることを考えたり、感じたりするしかたというのは、実はかなり共同的に規制されている。A ぼくたちが共有してい

る「文化の地平」に収まらない異物は、そもそも知覚も思考もされない。

自分では「個性的なものの見方」と思っていることが、ある世代まるごと共有されている、「縛り」であるということは、同世代や同類たちとつるんでいるだけでは絶対に分からないのです。

ぼくは一年近く、鈴木晶さんとメールで往復^a ショカンをしました。

鈴木さんはぼくと一つ違いで、同じような東京の進学校を出て、大学も一緒、その後大学院に行つて、やってた仕事にもずいぶん共通点があります。

そういう人と意見交換してみたら、それまで自分の個性だと思っていたもののうちのかなりの部分が、一九五〇年東京生まれの同代人に共通のものだ、ということに気づかされました。

そういう B 同世代の共通項を控除して、その後に残るもの、それがとりあえず「私の個性」と呼べるものなわけです。そういう「すり合わせ」をしていかないと、自分が「個性」だと思ひ込んでいたものが、実は C ある時代や、ある地域の文化が作り上げてきた「民族的偏見」にすぎなかったということにはなかなか気づきません。

自分と自分の同類たちを共同的に制約している「縛り」に気づくの一番 b コウカ的なアプローチは異文化との接触です。

たとえば、^②英語の人としゃべっていると、英語では言えないことが自分の中にある、ということに気づきます。

英語で「それじゃ、日本の文化について語ろう」ということになったとき、こちらの口から出るのは、結局ストックフリーズ〔ち手縛り〕なわけです。英語の本でこれまで読んできて、まるごと覚えたストックフレーズばかりがつい口をつけて出てきてしまう。

そういう局面で、ぼくの口から出てくることは、たいてい欧米の^①人たちが日本を^②ヒハンするときの決まり文句です。しかたがないですよ。

英語でうまくしゃべるといことは、英語的なワーディング〔言ひ〕で、英語的なアクセントで、「いかにも英語圏の人間が言いそうなこと」を^③サイゲンしてみせるということなんです。

英語話者には思いもつかないようなアイディアは、伝えようとしても伝えられない。だって、それを語る単語や表現を、これまで英語の本で読んだこともないし、英語で話しているのを聞いたこともないんです。

英語に堪能になるといのは、要するに、英語のストックフレーズをたくさん覚えこんで、英語圏の人たちが「言いそうなこと」を同じような^④クチヨウで復唱することになってしまうのです。

以前サンフランシスコに行ったときに、帰りの空港のカウンターで、空港職員の態度が非常に悪かったことがありました。長い間人を待たせておいて、だから仕事をしているし、割り込む人がいても、それを咎めもしない。ぼくは二〇分くらい待たされた果てに、腹が立ってきて、ついカウンターをばんと叩いて、「ぼくは二〇分ここで待っているが、君はさらに何分ぼくを待たせるのか」と怒鳴ったのです。

この瞬間、ぼくは自分の英語があまりに滑らかだったのでびっくりしました。

あ、そうか、英語というのは「私が正しい、君は間違っている、私には権利がある、君には^⑤Aがある」というようなことを言うおとすると、すぐくスムーズに出ることばなんだ、ということが^⑥腑に落ちました。

「まず怒鳴る」と実にアメリカ的な語り口になるんです。「あ、すみません。勝手なお願いですけど、聞いていただけます?……」とか、「おっしゃることは確かによく分かるんですけども、ちょっと微妙に違うんですね……」みたいなことを言うおとすると、

まるで英語にならない。

英語で語るということは、英語話者たちの思考のマナーや生き方を承認し、それを受け容れるということなのです。

逆から言うと、日本語で思考したり表現したりするということは、日本語話者に固有の思考のパターン、日本人の「種族の思想」を受け容れるということです。

そういうふうにして、自分が「個性」だと思っていたものの多くが、ある共同体の中で体質的に形成されてしまった一つの「フレームワーク」にすぎない、と気がつくわけです。

じゃあ、自分はいつたいどんなフレームワークの中に閉じ込められているのか、そこからどうやって脱出できるのか、というふうな問いを立てるところから、はじめて反省的な思考の運動は始まります。

「私はどんなふうを感じ、判断することを制度的に強いられているのか」、これを問うのが要するに「思考する」ということです。若者たちはオリジナルであることが大好きです。でも、彼らが自分のかけがえない個性だと思っているものの九五パーセントくらいは、実は「既製品」なのです。

空間的に自分が「どこにいるか」ということは比較的簡単に分かります。しかし、時間の流れの中のどこに自分はいっているのか、ということは、「勉強」しないと分かりません。

時間の流れの中で自分を位置づけること、それが「歴史的なものの方」というものです。マルクス主義（社会主義思想）以来、これが「思考すること」の基本とされています。

たとえば、自分たちの世代を含んだ日本の戦後の文化とか、明治以降の文化や日本の近代以降の中で自分はどういうポジションにいるのか、そういうことを考えるのが、歴史的な発想法です。でも、^⑤そういう視点を取る人は、意外に少ないのです。

ぼくはよく「マッピング」ということばを使います。

「マッピング」というのは、「地図上のどの点に自分がいるかを特定すること」という意味です。地図の中のどこに自分がいるかということ、「今・ここ・私」を中心に行っている限り、絶対に分かりません。当然ですけど。

だって、そうでしょ。「地図を見る」というのは、とりあえず、「今・ここ・自分」を、ここに、入れて、そこから想像的に遊離して、上空に仮設した「鳥の眼」から見下ろす、ということなんですから。

想像的に視点を自分から離脱させてみる。視座をどんどん遠方にずらせば、遠方から「自分を含んだ風景」を見ることが出来る。自分自身を含んだ大きな風景を、都市を、大陸を、地球を、想像できる。高度を上げられる人ほど自分の空間的な位置取りについて、より多くの情報を手に入れることができます。

⑥ これが空間的なマッピングです。時間の流れの中のマッピングも原理的には同じことです。

自分がどんなふう形成されてきたのかを見る、ということですよ。

自分の家庭や会社や共同体、その網目のどこに自分がいて、どのような機能を果たしているのか。どういう要素の複合効果として自分は出現してきたのか。条件がどういふふうに変われば、自分は「消え去る」のか。そういうことを考えるのが「時間的マッピング」です。

自分の「前史」を見通すということですね。

今の自分のものの見方や考え方を絶対視する人とは、要するに「マッピング」する知的習慣を持っていない人のことです。「私は私だ」「オレにはオレのやり方があるんだ」という言い方をよく耳にしますが、こういうことを言う人はあまり頭がよくないと判じて構いません。だって、その人の言う「オレ」の構成要素のほとんどは歴史的に「作られたもの」なんです。その人とまったく同じような「オレ」がこの人の同世代、同地域には⑦ 掃いて捨てるほどいるということに、この「オレ」さまはまるで気がついていないのです。

「オレはオレだ」と威張っている限り、自分のものの見方が形成された「前史」を知ることができません。⑧ 一人で腕組みして、

うんうん内省してみても、自分の「前史」は知ることができない。

これはもう「勉強」するしかないのです。

「自分の個性を知る」というのは、「個人的な作品」を作り出すというようなことではありません。

それを勘違いしている若い人が多すぎます。

「これがオレの感覚なわけ」とか「オレだけのこだわり、つうの？」というようなことを言う人、ほんとに頭が悪いと思います。

「自分の個性を知る」というのは、ほんらい「消去法」的な作業なんです。

自分たちの生きている社会の成り立ちを「勉強」することによって、ある世代、ある地域集団の全体にのしかかっている⑨「大気」を認識できた人間だけが、それを控除した後になお残っているものを、自分の「個性」として認知できるのです。

もし「個性」というものがほんとうに発見され表現されるべきものだと思ふのなら、自分の記憶の中にある偽造され外部から「事後的に」注入された部分を選び出し、除去してゆくという作業が必要になるでしょう。「ビートルズ世代」としてビートルズを聴いて、「全共闘世代」として学園闘争を戦ったというふうには⑩「偽りの記憶」を内面化させた同時代人をほくは何人も知っています。彼らはリアルタイムではビートルズなんか聴いてなかったし、学園闘争にも背を向けていた。しかし、その事実は忘れられ、より快適な「共同的記憶」が彼らの自己史には採用されている。もし、この人たちが本当に個性的であろうとしたら、共同的な「模造記憶」からではなく、彼らが少年だった頃に、誰とも共有できず、誰にも承認されなかった彼らの内密で、ユニークな幻想や情念を記述するところから始めるべきでしょう。

すべての世代はその世代に固有の「正史」を持っています。それはたとえば、流行した音楽やTVの人気番組やマンガや映画の記憶です。「おお、あれな、オレも毎週見てたよ」というふうにして同世代の宴会は盛り上がるわけですが、この「おお、オレも」の相当部分は（たぶんお気づきでしょうが）かなり誇張されています（ほんとうは「毎週」ではなく「たまに」だったり、あるいは「ぜんぜん」だったり）。

でもこのわずかな（あるいは大幅な）誇張によって「オレたち」という記憶の共同体に「オレ」は住民登録できるわけです。でも、個性的であるというのは、「記憶の共同体」への住民登録を求めないということです。頭にぎっしり詰め込まれた「偽造された共同的記憶」を振り払い、誰にも共有されなかった思考、誰にも言えなかった欲望、一度もことばにできなかつた心的過程を拾い集める、ということです。

これは徹底的に知的な営みです。メディアでは人々が「個性的に」ということを実にお気楽に口にしてはいますが、^⑪「個性的である」というのは、ある意味で、とてもきついことです。誰からも承認されたいし、誰からも尊敬されたいし、誰からも愛されたい。そのことを覚悟した人間だけが「個性的であること」に賭金を置けるのですから。

そんなことができる人間はほんとうに少数です。ですから、ほんとうに個性的な人間というのは「オレは個性的な人間だ」と思い込んでいる人間の数の千分の一もいないのです。

【問1】 ㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい（楷書でていねいに書くこと）。

- a シヨカン b コウカ c ヒハン d サイゲン e クチヨウ

【問2】 ㉢「これはけっこう危険なことばだからです」とありますが、筆者はなぜ「危険」だと考えているのですか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 自分の持つ固有の特性にこだわって、周りの人たちと馴染むことができず孤立してしまうかもしれないから。
(イ) 自分だけの固有の特性だと思っても、生まれ育った時代や場所に強く影響を受けていることが多いから。
(ウ) 自分の信じる固有の特性に重きを置くと、他の人の考え方を否定するような排他的な振る舞いにつながるから。
(エ) 自分にとっての固有の特性を大事にしすぎて、変化することを恐れるあまり人としての成長が妨げられるから。

【問3】

——②「英語の人としゃべっていると、英語では言えないことが自分の中にある、ということに気づきます」とありますが、なぜですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 他国の言語で話すことに強い抵抗を感じるから。
- (イ) 身につけた英語の決まり文句の数が足りないから。
- (ウ) 日本語と英語とはものの見方や考え方が異なるから。
- (エ) 欧米人のように身振りを交えて話すのが恥ずかしいから。

【問4】

A

には、「権利」という語の対義語が入ります。適当な語を漢字2字で答えなさい。

【問5】

——③「腑に落ちました」、——⑦「掃いて捨てるほどいる」とありますが、(1)「腑に落ちる」・(2)「掃いて捨てるほどいる」とはそれぞれのどのような意味ですか。適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- (ア) うわさに聞いていたとおりのこと。
- (イ) 新しい事実を自分で突き止めること。
- (ウ) いつでもだれにでもあてはまること。
- (エ) ありきたりでどこにでも見られること。
- (オ) 袋小路に入りどうしようもなくなること。
- (カ) 物事についての情報を得てそれを認めること。

【問6】——④「ある共同体の中で体質的に形成されてしまった一つの『フレームワーク』とありますが、これは「ある社会の中で知らず知らずのうちに身についた考え方」という意味です。~~~~~A～Dの中から、これと異なる意味で用いられている表現を1つ選び、A～Dの記号で答えなさい。

【問7】——⑤「そういう視点」とありますが、どういうことですか。次の説明文の にあてはまる表現を本文中から20字以内で抜き出し、答えなさい。

「そういう視点」とは、 によって自分を相対化するようなものの見方のことである。

【問8】——⑥「これが空間的なマッピングです。時間の流れの中のマッピングも原理的には同じことです」とありますが、(1)「空間的マッピング」・(2)「時間の流れの中のマッピング」とはそれぞれどういうことですか。適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- (ア) 自分を歴史の流れの中心に据えて、社会がどのように成り立っているのかを見定めること。
- (イ) 事細かに歴史的な人物や事件について勉強することを通して、自分の卑小さひしやうに気づくこと。
- (ウ) 自分が住んでいる場所を遠方から見ると、実際に高い所に登って地上を見下ろすこと。
- (エ) 遠く高い所から見下ろすようにして、どのあたりに自分が位置しているのかを理解すること。
- (オ) 歴史を大局的に捉えたのちに、一時的に保留にしていた自分を歴史の中に位置づけなおすこと。
- (カ) 自分の属する共同体が地図上のどこに位置しているのかを知り、その地域の情報を手に入れること。

【問9】——⑧「一人で腕組みして、うんうん内省してみても、自分の『前史』は知ることができない」とありますが、「前史」

を知るためにはどうすべきだと筆者は言っていますか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 居住地の文化・歴史を先人から受け継ぐこと。
- (イ) 社会を変えた歴史上の重要な出来事を知ること。
- (ウ) 自分の生きている時代の一つ前の時代を学ぶこと。
- (エ) 自分の属する社会ができあがった背景を考えること。

【問10】——⑨『大気圧』とありますが、これはどのようなことをたとえたものですか。もっとも適当なものを次の中から選び、

- (ア) (ア)～(エ)の記号で答えなさい。
- (ア) 私たちの日常生活をたえず圧迫する、ひどく重苦しいもの。
- (イ) 意識することは難しいが、私たちに影響を及ぼしてくるもの。
- (ウ) 重要な意味を持つように見えながらも、まったく価値のないもの。
- (エ) 目で捉えることはできないが、私たちの生活にとって大切なもの。

【問11】——⑩『偽りの記憶』を内面化させた同時代人」とありますが、これはどのような人々のことですか。もつとも適当な

ものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) ビートルズの影響が社会的に大きい時期だったので、ビートルズの歌詞の内容は理解できなかったとしても、ビートルズの思想を理解し継承してきたと自慢するような人々。

(イ) ビートルズに熱狂していた人が多いとされる世代の一員だったために、ビートルズをよく知らないにも関わらず、ビートルズをよく知っていると言わざるをえないような人々。

(ウ) ビートルズが流行っていたときにはビートルズのがさほど好きではなかったが、周囲にあわせてレコードをすべて購入し、友人たちにビートルズ好きを吹聴していたような人々。

(エ) ビートルズにそれほど夢中ではなかったにも関わらず、ビートルズに熱狂していた人々と同じ時代を生きただけで、かつて自分もビートルズの熱心なファンだったと思込んでいるような人々。

【問12】——⑪『個性的である』というのは、ある意味で、とてもきついことです」とありますが、これに関する次の説明文の

(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「友達の個性を認めよう」「自分の個性を伸ばそう」。このような言葉を聞いたことがあると思います。まるで誰もが「個性」なるものを持っているように聞こえますが、ここで使われている「個性」という言葉は、「足が速い・遅い」「読書が好き・嫌い」などの能力の程度や好みの傾向にすぎません。

しかし、筆者の述べている「個性」とは、そのようなものとは異なります。筆者は、「私」が考えることのほとんどが、

- (1) (ア) 他人からの受け売りである
 (イ) 外国文化の影響を受けている
 (ウ) 学校によって育まれたものだ
 } と言っているのです。

では、「私の個性」はどこにあるのでしょうか。「私の個性」は、自分以外の人々、自分の国以外の国、自分の生きて
 いる時代以外の時代のことをよく知り、そのすべてを (2)

- (エ) 本来の私に一体化させたもの
 (オ) 受け入れた上で形成されるもの
 (カ) 自分の中から取り除いた残りもの
 } なのです。

筆者は、フランスで店員さんの愛想あいそがとても悪いことに驚いたという話を別のところで紹介しょうかいしています。フランス人は、サービスを自分相手が相手より下位にあるときにすることだと考えているので、対等だと思っている場合はむやみに愛想をふりまいたりはしません。ところが日本では、店員さんには愛想よく応対してもらえると愛想よくふるまうものだと時々愛想あいその悪い店員さんがいたりすると、嫌いやな気持ちになるものです。お客さんに対しては愛想よくふるまうものだと

- (3) (キ) 客としての傲慢ごうまんさ
 (ク) 営業上の約束ごと
 (ケ) 日本人の思い込み
 } は、子どもの頃から「お店やさんごっこ」で遊び、多くの店員さんを見て

いるうちに身につけた日本の文化だと言えるのです。このように、「私の考え方」は自分が意識しないうちに、「私を取り囲むもの」で出来上がっています。

「个性的である」ことは、だれとも何も共有しないということなのです。その意味で、「个性的である」ことは、

(4)

(シ)	いわば「孤独」であること
(サ)	他人と「絶縁」すること
(コ)	自分を「盲信」すること

と 同じなのかもしれません。そのようにできる人はそうは多くはいま

せん。だからこそ、「個性的であること」はきわめてまれだと言えるのです。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

虔十けんじゅうはいつも縄なわの帯をしめて、わらつてもりの中や畑の間をゆっくりあるいているのでした。

雨の中の青いやぶを見ては、よろこんで目をパチパチさせ、青ぞらをどこまでもかけて行く鷹たかを見つけては、はねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子どもらが虔十をばかにしてわらうものですから、① 虔十はだんだんわらわないふりをするようになりました。

風がどうとふいて、ぶなの葉がチラチラ光るときなどは、虔十はもううれしくてうれしくて、ひとりでにわらえてしかたないので、むりやり大きく口をあき、はあはあ息だけついでごまかしながら、いつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

ときにはその大きくあいた口の横わきを、さもかゆいようなふりをして指でこすりながら、はあはあ息だけでわらいました。

なるほど遠くから見ると虔十は口の横わきをかいているか、あるいはあくびでもしているかのように見えました。近くではもちろんわらっている息の音もきこえましたし、くちびるがピクピク動いているのもわかりましたから、子どもらはやっぱりそれもばかにしてわらいました。

おっかさんにいいつけられると虔十は水を五百ばいでもくみました。一日いっぱい畑の草もとりました。けれども虔十のおっかさんもおとうさんもなかなかそんなことを虔十にいいつけようとはしませんでした。

さて、虔十の家のうしろにちょうど大きな運動場ぐらいの野原がまだ畑にならないで残っていました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新しい草も芽を出さない時、虔十はいきなり田打ちをしていた家の人たちの前に走ってきていいました。

「お母が、おらすぎさ杉苗なえ七百本、買ってける。」

「慶十のおつかさんは、きらきらの三本ぐわを動かすのをやめて、じつと慶十の顔を見ていました。」

「杉苗七百ど、どごさ植えら。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき慶十のいさんがいました。

「慶十、あそこは杉植えでも成長らない処だ。それより少し田でも打って助ける。」

慶十は **1** もじもじして下をむいてしまいました。

すると慶十のおとうさんがむこうで汗をふきながらからだをのびして、

「買ってやれ、買ってやれ。慶十あ今まで何一つだて頼んだことあながったもの。買ってやれ。」

といましたので、**2** 慶十のおかさんも安心したようにわらいました。

慶十はまるでよろこんでまっすぐに家のほうへ走りました。

そして納屋から唐ぐわをもち出して、ぼくりぼくりと芝を起こして、杉苗を植える穴を掘りはじめました。

慶十のいさんがあとを追ってきてそれを見ていました。

「慶十、杉あ植える時、掘らないばわがないんだじや。あしたまでまで。おれ、苗買ってきてやるがら。」

慶十は **2** くわをおきました。

つぎの日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光り、ひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして慶十はまるでこらえきれないようににこにこわらって、にいさんに教えられたように、今度は北のほうのさかいから杉苗の穴を掘りはじめました。じつにまっすぐにじつに間隔正しくそれを掘ったのでした。慶十のいさんがそこへ一本ずつ苗を植えていきました。

そのとき野原の北側に畑をもっている平二が、きせるをくわえてふところ手をして寒そうに肩をすぼめてやってきました。平二は百姓も少しはしていましたが、じつはもつと別の、人にいやがられるようなことも仕事にしていました。平二は慶十にいました。

「やい。慶十、ここさ杉植えるなんてやっぱりばかだな。第一おらの畑あ日かげにならな。」

慶十は顔を赤くして何かいいたそうにしましたがいえなくてもじもじしました。

すると慶十のいさんが、

「平二さん、お早うがす。」といつてむこうに立ちあがりましたので、^③平二はぶつぶついながら、またのつそりとむこうへ行つてしまいました。

その芝原へ杉を植えることをわらったものはけっして平二だけではありませんでした。あんなところに杉など育つものでもない、底はかたい粘土なんだ、やっぱりばかはばかだとみんながいつておりました。

^④それはまつたくそのとおりでした。杉は五年までは緑いろの心がまつすぐに空のほうへのびていきましたが、もうそれからはだんだん頭がまるくかわって七年目も八年目もやっぱり丈が九尺（一尺は約30cm）ぐらいでした。

ある朝、慶十が林の前に立っていますと、ひとりの百姓がじょうだんにいいました。

「おおい、慶十。あの杉あ枝打ちささないのが。」

「枝打ちていのは何だい。」

「枝打ちつのは下のほうの枝、山刀で落とすのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

慶十は走って行って山刀をもってきました。

そしてかたつぱしから、ぱちぱち杉の下枝をはらいはじめました。ところがただ九尺の杉ですから、慶十は少しからだをまげて、杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときは、どの木も上の枝をただ三、四本ぐらいずつ残して、あとはすっかりはらいおとされていました。

こい緑いろの枝はいちめん以下草をうずめ、その小さな林はあかるくがらんとなくなっていました。

慶十はいつぺんにあんまりがらんとなったので、なんだか気もちが悪くて胸が痛いように思いました。

そこへちようど慶十のいさんが畑から帰ってやってきましたが、林を見て思わずわらいました。そして⑤ ほんやり立っている慶十にきげんよくいいました。

「おう。枝集めべ、いい焚きものうんと出来た。林もりっぱになつたな。」

そこで慶十もやつと安心して、にいさんといっしょに杉の木の下にくぐって、落とした枝をすっきり集めました。

下草はみじかくてきれいで、まるで仙人たちが碁でもうつところのように見えました。

ところがつぎの日、慶十は納屋で虫くい大豆をひろっていましたが、林のほうでそれはそれは大さわぎがきこえました。

あつちでもこつちでも、号令をかける声、ラッパのまね、足ぶみの音、それからまるでそこらじゅうの鳥も飛びあがるような、どつと起こるわらい声、慶十はびっくりしてそっちへ行ってみました。

するとおどろいたことは、学校がえりの子どもらが五十人も集まって、一列になって歩調をそろえて、その杉の木のあいだを行進しているのです。

まったく杉の列はどこを通っても並木道のようにでした。それに青い服を着たような杉の木の間も、列をくんであるいているように見えるのですから、子どもらのよろこびかげんといったらとてもありません。みんな顔を真っ赤にして、もずのようにさげんで杉の列のあいだを歩いているのです。

その杉の列には、東京街道、ロシヤ街道、それから西洋街道というようにずんずん名まえがついていきました。

⑥ 慶十もよろこんで、杉のこつちにかくれながら、口を大きくあいて、はあはあわらいました。それからはもう毎日毎日子どもらが集まりました。

ただ子どもらのこないのは雨の日でした。

その日は真っ白なやわらかな空から、あめのさらさらとふる中で、慶十がただひとり、からだじゅうずぶぬれになって林の外に立つ

ていました。

「虔十さん。きょうも林の立番たちばんだなす。」

みのを着て通りかかる人がわらっていいました。その杉にはとび色の実がなり、りっぱな緑の枝さきからは、すきとおったつめた
い雨のしずくがポタリポタリとたれました。虔十は口を大きくあけて、はあはあ息をつき、からだからは雨の中にゆげをたてながら、
いつまでもいつまでもそこに立っているのです。

ところがある霧きりのふかい朝でした。

虔十は普場かやばで平二へいじといきなり行きあいました。平二はまわりをよく見まわしてから、まるでおおかみのようないやな顔をしてどな
りました。

「虔十、き「おまえのとじろの」さんどこの杉きれ。」

「何してな。」

「おらの畑あ、日かげにならな。」

虔十はだまって下をむきました。平二の畑が日かげになるといったって、杉の影かげがたか「たかだか」で五寸（一寸は約3cm）もはいつてはいなかっ
たのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風をふせいでいるのです。

「きれ、きれ。きれないが。」

「きれない。」虔十が顔をあげて少しこわそうにいいました。そのくちびるはいまにも泣き出しそうにひきつっていました。⑦じつ
にこれが虔十の一生のあいだのたった一人に対するさからいのことばだったのです。

ところが平二は、人のいい虔十などにばかにされたと思ったので、急におこりだして肩かたをはったと思うと、いきなり虔十のほおを
なぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

虔十は手をほおにあてながらだまってなぐられていましたが、とうとうまわりがみんなまっさおに見えて、よろよろしてしまいま

した。すると平二も少しきみが悪くなったとみえて、いそいで腕をくんでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまいました。さて虔十はその秋チブスにかかって死にました。平二もちようどその十日ばかり前に、やつぱりその病気で死んでいました。ところがそんなことにはいっこうかまわず、林にはやはり毎日子どもが集まりました。

⑧ お話はすんずんいそぎます。

つぎの年、その村に鉄道が通り、虔十の家から三町（一町は約110m）ばかり東のほうに停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずんつぶれて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。

⑨ その中に虔十の林だけは、どういうわけかそのまま残っておりまして。その杉もやつと一丈（約3m）ぐらい、子どもらは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建っていましたから、子どもらはその林と林の南の芝原とを、いよいよぶんらの運動場のつづきとってしまいました。

虔十のおとうさんも、もうかみがまっ白でした。まっ白なはずです。虔十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日、昔のその村から出て、いまアメリカのある大学の教授になっている若い博士が、十五年ぶりで故郷へ帰ってきました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあったでしょう。町の人たちもたいいは新しく外からきた人たちでした。

それでもある日、博士は小学校からたのまれて、その講堂でみんなにむこうの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出て、それからあの虔十の林のほうへ行きました。

すると若い博士は、おどろいて何べんもめがねをなおしていましたが、^⑩ どうとう半分ひとりごとのようにいいました。

「ああ、ここはすっかりもとのとおりだ。木まですっかりもとのとおりだ。木はかえって小さくなったようだ。みんなも遊んでいる。ああ、あの中にわたしやわたしの昔の友だちがいないだろうか。」

博士はにわかにながめたようにわらい顔になって、校長さんにいいました。

「ここは今は学校の運動場ですか。」

「いいえ、ここはこのむこうの家の地面なのですが、家の人たちがいつこまわらないで、子どもらの集まるままにしておくものですから、まるで学校の付属の運動場のようになってしまいました。じつはそうではありません。」

「それはふしぎな方ですね。いったいどういうわけでしょう。」

「ここが町になってから、みんなで売れ売れと申したそうですが、年よりの方がここは慶十のただ一つのかたみだから、いくらこまっても、これをなくすることは、どうしてもできないと答えるそうです。」

「ああそうそう、ありました、ありました。その慶十という人は少したりないとわたしは思っていたのです。いつでもはあはあわらっている人でした。毎日ちようどのへんに立ってわたしらの遊ぶのを見ていたのです。この杉もみんなその人が植えたのだそうです。ああまったくたれがかしこく、たれがかしこくないかはわかりません。ただどこまでも十力じゅうりき（仏が持つ十種の力のこと）の作用はふしぎです。ここはもういつまでも子どもたちの美しい公園地です。どうでしょう。ここに慶十公園林けんじゅうこうえんりんと名をつけて、いつまでもこのとおり保存するようにしては。」

「これはまったくお考えつきです。そうなれば子どもらもどんなにしあわせかしれません。」

さてみんなその通りになりました。

芝生しばふのまんなか、子どもらの林の前に、

「慶十公園林」とほった青い橄欖石かんらんがんの碑ひが建ちました。

昔その学校の生徒、今はもう立派な検事になったり、将校になったり、海のむこうに小さいながら農園をもったりしている人たちから、たくさんの手紙やお金が学校に集まってきました。

慶十のうちの人たちはほんとうによるこんで泣きました。

まったくまったく、この公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかなにおい、夏のすずしいかげ、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに、ほんとうのさいわいが何だかを教えるかかぞえられませんでした。

① ① そして林は、^{けんじゅう} 庚十のいた時のとおり雨がふっては、すきとおるつめたいしづくをみじかい草にポタリポタリと落とし、お日さまがかがやいては、新しいきれいな空気をさわやかにほき出すのでした。

【問1】

—— ① 「^{けんじゅう} 庚十はだんだんわらわないふりをするようになりました」とありますが、^{けんじゅう} 庚十のどのような様子が表れていますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 自然の中で感じられる喜びやうれしさを、周囲の人々が理解しようとしないうちに不満を抱かざるをえず、いつしか他人の前では表情が曇るようになってしまった、ということ。

(イ) いつも笑顔であるために、周囲の人々が自分を軽く見ていることがわかり、さまざまな事物を見ては、すぐに喜んでしまう性格自体をなんとか改めようとしていた、ということ。

(ウ) ふだん自分が感じる喜びや楽しさが、周囲の人々にはわかってもらえないことに、しだいに気づかざるをえず、感情を表に出すことをおさえるようになっていった、ということ。

(エ) うれしそうにする自分の姿を周囲の人々がおかしく思っていることを知り、ささいなことになぜ喜んでしまうのかという、自分自身への疑問が日増しに強くなった、ということ。

【問2】

1

2

に共通して当てはまる語句として、もっとも適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

(ア) むくれながら

(イ) きまり悪そうに

(ウ) 取り乱しながら

(エ) なごり惜しそうに

【問3】

——②「虔十のおかあさんも安心したようにわらいました」とありますが、この時の「虔十のおかあさん」の様子を説明したものととして、次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 虔十の希望とそれに対する「にいさん」の意見がぶつかり、険悪な雰囲気ふんいきとなっていました。そんな中で「おとうさん」が取りなすような一言をかけてくれたために、対立がそれ以上深刻なものにならず、「おかあさん」はほっとした。

(イ) 大量の杉苗すぎなえを買ってほしいという虔十の申し出は、「にいさん」が言うように家の現状にそぐわないものだった。しかし、虔十を思いやる「おとうさん」の一言を聞いて、「おかあさん」は自分もがんばっていいこうと思いを新たにしました。

(ウ) 虔十がなぜそんな希望を持ったのかわからず、「にいさん」もなぜ虔十に強く当たるのか理解できなかつた。そこへ虔十の側に立つ「おとうさん」の一言があつたため、「おかあさん」は自分も今後どう振ふる舞まえばよいかはつきりした。

(エ) 虔十からの申し出に応こたえたいと思う一方、「にいさん」の言うことももつともであり、どう反応していいかわからなかつた。そこへ「おとうさん」が判断を示す一言を発したこと、で、「おかあさん」は虔十にとってはよかつたと感じた。

【問4】

——③「平二はぶつぶついながら、またのっそりとむこうへ行ってしまいました」とありますが、この時の平二の様子はどのようなものだったと考えられますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「にいさん」から声をかけられたため、けいじやう 虔十に言いがかりをつけていたことをごまかしながら、平二はゆつくりとその場を離れた。はな

(イ) 苦手だった「にいさん」が現れたので、気づかないふりをして顔をあわせないようにしながら、平二はこっそりとその場を離れた。

(ウ) 「にいさん」がいるとは予想もしていなかったので、おどろ 驚いてしまったことをなんとか隠しながら、平二はだまっていたのでその場を離れた。

(エ) あいさつをしてきた「にいさん」に対しても、自分が虔十に不満があることを示しながら、平二はいばった態度でその場を離れた。

【問5】

——④「それはまったくそのとおりでした」とありますが、ここでの「それ」とはどのようなことを指していますか。その内容をもっともよく表しているものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 人々に笑われても、しばはら 虔十が芝原へ杉を植えたこと。

(イ) 虔十を笑ったのは、平二だけではなかったこと。

(ウ) 人々が、芝原に杉など育たないと言ったこと。

(エ) 杉を植えた芝原の底は、かたねんど 硬い粘土であること。

【問6】

⑤ 「ぼんやり立っている慶十にきげんよくいました」とありますが、この時の「慶十の兄さん」の様子を説明したものととして、次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 枝打ちを少々やりすぎてしまった慶十を、それ以上責めても仕方ないことだと思い、自分だけは慶十に対し明るく接してあげようとした。

(イ) どこか落ちこんでいる様子の慶十に、枝打ちによって林の姿が大きく変化したことに対して、自分は素直すなおに喜んでいと伝えようとした。

(ウ) 枝打ちによって林がすっかりさびしい姿となってしまったのは大きな失敗だったと気づいたが、それでも何とか慶十をほげまそうとした。

(エ) 慶十が枝打ちをしなければならぬと気づいただけでなく、たった一人で実行したことがわかって驚おどろき、きちんとほめてあげようとした。

【問7】——⑥「^{けんじやう}「^{すき}度十もよろこんで、杉のこっちにかくれながら、口を大きくあいて、はあはあわらいました」とありますが、

なぜ度十は「杉のこっちにかくれながら」笑っていたと考えられますか。次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 多くの子どもたちが^{すきはやし}杉林で遊んでいる姿を見て、ついに自分の夢が実現したと感じ、願いがかなったよろこびを一人でかみしめたいと、度十は思ったから。

(イ) 自分が育てた杉林で子どもたちが楽しく遊ぶことはこれ以上ないよろこびであり、そんな子どもたちの姿を間近からながめていたいと、度十は思ったから。

(ウ) 子どもたちが遊ぶ杉林を、自分が植えて育てたということが明らかになってしまうと、子どもたちが来てくれなくなるかもしれないと、度十は思ったから。

(エ) 自分の姿が子どもたちの目にとまれば、また笑われるかもしれないと、かえって杉林で遊ぶ子どもたちのじゃまをしてしまうことになる、度十は思ったから。

【問8】——⑦「じつにこれが度十の一生のあいだのたった一人に対するさからいのことばだったのです」とありますが、

この表現から読みとることができるとして、もっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 杉林と共にあることが日常となっていた度十にとっては、杉林を軽視する平二の言葉は自分の存在を否定するようなものであり、絶対にしたがうことはできなかった。

(イ) 常に不安にかられながら杉林を見張っていた度十であったが、自分に悪態をつき続ける平二に対しては、しだいに怒りがこみ上げていき、ついに我慢が^{がまん}できなくなった。

(ウ) 杉林の成長のための努力をおこなったらなかった度十は、平二のおどしにも動じない強さをいつのまにか身につけており、ここで自分の意志をはっきり表明することができた。

(エ) いつもおとなしい虔十が、杉林をきれという平二の言葉をはつきり断ったことには、杉林の育成に協力してくれた家族の思いも背負^{せお}っているという責任感が表れている。

【問9】

——⑧「お話はずんずんいそぎます」とありますが、この表現を説明したものととして、次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 虔十と平二が死んだのは、争いは不幸をもたらすことをあらわしており、争いが消えた後の平穏^{へいおん}な月日のなかで、また別の物語がはじまるということを、作者は示している。

(イ) 杉林の主人であった虔十が死んだことを、林に集まる子どもたちが気にするわけはなく、虔十の死後の物語では、子どもたちが主役となるということを、作者は示している。

(ウ) 虔十は死んでしまったが、杉林を育てたその強い思いは残り続けたのであり、これ以降の物語においても、虔十の姿を見ることができるということを、作者は示している。

(エ) 虔十と平二という、物語における主要な人物が死んだにもかかわらず、杉林をめぐる物語は、その後長い年月を通してさらに進んでいくということを、作者は示している。

【問10】

——⑨「その中に虔十の林だけは、どういうわけかそのまま残っておりまし」とありますが、その「わけ」を示す以下の文の□にあてはまる表現を、8文字で本文中より抜き出し、答えなさい。

虔十の家族にとってこの林は、虔十の□だったから。

【問11】

——⑩「とうとう半分ひとりごたのようにいいました」とありますが、ここでの「若い博士」の様子について説明した
ものとして、次の中からもっとも適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 周囲の様子が大きく変化しているにもかかわらず、林と子どもたちの姿は自分がそこにいた時のままであることに
少し混乱してしまい、自分がどこにいるのかわからなくなっている。

(イ) 昔の姿を保ったままの林とそこで遊ぶ子どもたちの変わらない様子を見て、いつのまにか「若い博士」のものの見
方や感じ方も、自分がかつてそこで遊んだころのものに戻っている。

(ウ) 思い出ぶかい林がそのままの形で残っていることに大いに驚き、その感動を小学校の校長に伝えるために「若い博
士」はあえて、子どもたちの自分に戻ったような言い方をしている。

(エ) 昔と変わらない様子の林と子どもたちに接したことで、そこで遊んでいた当時の自分を思いだし、すっかり失われ
てしまったかつての友人たちとの記憶を必死にたどり直そうとしている。

【問12】

——⑪「そして林は、けんじゅう 虔十のいた時のとおり雨がふつては、すきとおる つめたいしずくをみじかい草にポタリポタリと
落とし、お日さまががやいては、新しいきれいな空気をさわやかにほき出すのでした」とありますが、これに関する次の
説明文の **A** ～ **F** に当てはまる語を、後からそれぞれ選び、(ア)～(シ)の記号で答えなさい。

虔十のつくった杉林は、すきはやし 家族の尽力もあり、「虔十のいた時のとおり」の姿を保ち、子どもたちも毎日毎日そこで遊
んでいます。いつまでも続く「子どもたちの美しい公園地」を虔十はつくり上げたといえます。ただ、ここで忘れては
いけないのは、そんな虔十を **A** していたのも、子どもたちだったという事実です。だからこそ虔十は、この林
において子どもたちと一緒に遊ぶことはできなかったのです。この物語は、昔のままの姿を保つ林で楽しそうに遊ぶ子

どもたちを **B** しているというわけではなく、子どもたちの **C** とも含めて描いているということを見逃してはならないでしょう。

子どもたちが遊ぶ杉林は、故郷に戻ってきた「若い博士」の言葉をきっかけとして、「虔十公園林」と名付けられ、長く保存されることになりました。このことは逆にいえば、「若い博士」がやってこなければ、虔十の林は「学校の付属の運動場のよう」に思われているにすぎなかった、ということでもあります。アメリカで大学の教授をしているという、新たな考え方を身につけた「若い博士」によって、その虔十の林は、あらためて **D** されたのです。「若い博士」は、自分たちがばかりにしていた虔十がこの林を植えたということを思いだし、「たれがかしこく、たれがかしこくないかはわかりません」と述べています。村に鉄道が通って工場もでき、家が建ちならんで町になっていくなかで、そのままでの形を保っていた林。虔十が杉を植えた当時、その意味はまったく理解されませんでした。しかし、新しい時代が到来したからこそ、虔十とその林の **E** は、明確なものになったといえるでしょう。「若い博士」だけでなく、「虔十公園林」の設立を知り、協力をした「昔のその学校の生徒」も、今では「検事」や「将校」をしているという、新たな **E** 観を身につけているであろう人々でした。

「虔十のいた時のとおり」に、林は美しい緑と空気を人々にもたらし続けるでしょう。そんな「虔十公園林」の姿は、変わらないままであることの意味を感じさせてくれますが、時代が変化していくなかで、その意味を繰り返し見いだしていくことによって、**F** していく重要性も、同時に教えてくれるのです。

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| (ア) 創作 | (イ) 価値 | (ウ) 否定 | (エ) 発見 | (オ) 継承 | (カ) 育成 |
| (キ) 残酷 | (ク) 嘲笑 | (ケ) 美化 | (コ) 封印 | (サ) 位置 | (シ) 想像 |

【出典】

I 内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』（角川文庫、二〇〇七年）より。ただし、一部省略したところがある。

II 宮沢賢治「虔十公園林」（『風の又三郎』岩波少年文庫、二〇〇〇年）。

